

明治奇術師松旭齋天一と中国 —上海における交友関係をめぐって—

王 宝 平

はじめに

今日、松 旭 齋天一^{しょうきよくさいてんいち}といえは、専門家以外に知っている人があまりいないであろう。しかし、彼は明治時代を代表するようなマジシャンとして、日本国内だけでなく、世界的にも活躍した著名人であった。天一に関する先行研究をひもとくと、その履歴、ひととなり、興行活動などについては、詳細な研究が行われているが、海外の活動については、資料の制限もあり、関心が薄く、なおさら多くの謎に包まれている。特に3回ほどといわれる中国興行については、明治11年(1878)～12年、同20年(1887)、同22年(1889)12月～翌年5月とする説もあれば¹⁾、明治15年(1882)、同20年、同38年(1905)と唱える説もある²⁾。また、外務省外交史料館の海外旅券下付記録を調査した結果、実際に天一が旅券を下付された最初は明治22年の清国行きのときであったとされる³⁾。

小論では、天一と中国との交流を明らかにするための一環として、資料

1) 青園謙三郎著『松旭齋天一の生涯：奇術師一代』、品川書店、1976年、113頁。

2) 傅起鳳・傅勝竜著、岡田陽一訳『中国芸能史：雑技（サーカス）の誕生から今日まで』、三一書房、1993年、187頁。但し、出典は明記されていない。

3) 長野栄俊「松旭齋天一の新出写真資料について」、『若越郷土研究』57巻2号、2013年2月、61頁。

的に確認できた、明治22年（1889）の上海興行に焦点を絞り、その交友関係を探ってみたい⁴⁾。

本論に入る前に、天一の略歴を記しておく。松旭斎天一（1853～1912）は、福井藩士、牧野海平の8番目の子として1853（嘉永6）年福井市に生まれた。幼名は八之助。別家して服部家を興したため、本名は服部松旭である。15歳で放浪の旅に出て奇術を覚え、さらに、米国奇術師ジョネスに出会い、上海で西洋の奇術を修業したといわれる。1880（明治13）年、そのころ有名であった日本人奇術師帰天斎正一の名声にあやかり、松旭斎天一と改名した。その後、天皇皇后両陛下に御前公演も行ったりして、ますますその名を馳せるようになり、芸能としての奇術の地位向上に大きな役割を果たした。明治22～23年には清国、34～38年には欧米各国、42年は台湾での興行も成功させて、病気で引退する明治44年までの20年以上の期間、日本奇術界の頂点に君臨した。その後の日本奇術界発展の礎を築いたことから、「日本近代奇術の祖」⁵⁾とも呼ばれている。

一、天一と上海在住の日本人

日本と上海との正式な交渉は、文久2年（1862）に派遣された千歳丸によりその端緒を發し、在留日本人は、明治10年代に200人近く、明治27年（1894）日清戦争（甲午戦争）の当時、1,000内外に達していたと言われている⁶⁾。そのうち、画家安田老山、旧英租界河南路に樂善堂支店を開

4) 『松旭斎天一の生涯：奇術師一代』（青園謙三郎、品川書店、1976年、211頁）の巻末に設けられた「天一の友人」に、日本人7人、アメリカ人1人と挙げられているが、上海滞在中の友人については触れていない。

5) 河合勝・長野栄俊著『日本奇術文化史』、日本奇術協会編集、東京堂出版、2017年、386頁。

6) 米澤秀夫『上海史話』、畝傍書房、1942年、94頁、115頁。ちなみに在上海領事館が上海在留日本人数について行った調査では、明治34年（1901）12月末日が1473人、明治38年（1905）12月末日が4333人、明治39年（1906）2月20日が4973人となっている。遠山景直編『上海』、東京：遠山景直、1907年、389～390頁。

古今無比世界獨步東洋奇伎開演

奇伎之奇能殺人入水吐火有神妙不測者焉日本松旭齋天一以奇伎著名嘗航海至英國隨奇術博士花福曼受學數年之久盡極其秘術未以爲足也乃更潛心於格致之學探奇中之奇求理外之理精益求精巧益求巧遂獨得奇幻百出古今無比之法爾來遊歷歐美二洲法蘭西日耳曼瑞士意大利等邦遇有繁華都會莫不開演以博賞名聲藉藉馳於四方自歸日本後觀客屢集貴紳爭聘會經日皇太后皇后御覽更得外國貴賓哈因里親王數賞無論講與不識咸稱其名今者自東洋來港知港上縉紳多未知東洋之奇伎加之數年以來各戲館所演無一擇定英國領事館裏面西洋劇場自十一月十一日起開演七天願滬上紳商陸續來看輪其眼界廣其聞見特此佈告夜九點鐘開演至十一點半鐘爲止上等客位每人洋二元中等洋一元起碼洋五角乙

錦芝洋行主人白

図1. 天一の上海における最初の広告。1889年11月22日附『申報』

設した岸田吟香、東洋学館、日清貿易研究所などといった人物や団体は熟知されている。天一が明治22年（1889）11月⁷⁾から翌年2月まで上海渡航中に交際した日本人は、主に次の4人である。

錦芝洋行。1889年11月22日と23日に、近代中国の有力紙『申報』に、「古今無比世界獨步東洋奇伎開演」（古今無比、世界獨歩、東洋奇術開演）という題の広告が掲載された（図1参照）。天一一座は旧暦11月1日より英国領事館の裏にある「西洋劇場」で、夜9時から11時まで7日間連続して開演する。入場料金は、上等席は御一人前洋二元、中等席は御一人前洋一元、その他は御一人前五角、という。広告主は「錦芝洋行」と記されている。

そして、錦芝洋行は同28日に「東戲更新」（日本奇術更新）を同紙に掲

7) 蹉跎庵主人によると、天一は明治22年11月5日、横浜を起航し、10日に西京丸にて上海に到着している。「松旭齋天一興行年表」明治22年（1889年・37歳）条。http://blog.livedoor.jp/misemono/archives/cat_50049973.html

載して、更新された天一の奇術を、今晚9時に御来観あらん事を希望すると宣伝した。

しかし、11月28日の開演は都合でできなかったため、同30日に「松旭斎」の名義で、次のような広告を掲載した。「日本松旭斎天一が演じる東瀛の奇技は、円明園路の英国戯園にて行われ、中外の諸君を観覧に要請したものの、都合で開演できなくてご期待に背いてしまった。そこで、開演期日を変更して、今日から昼夜2回開演することになった。演じる各種の新しい奇術はますますその奇を増し、その妙は言い尽くせぬものがあり、概して、上海でいままで演じたことのない奇術である。昼の部2時に、夜の部9時に開演し、夜の部以外は、大人御一人前一元、子供は御一人前五角、上下等の料金の差がない。見聞を広げにとくにご覧あれ。松旭斎啓」という⁸⁾。

これらの広告を出した錦芝洋行は、「美（米国）租界百老匯路第一號門牌」に位して、天一の上海興行と時を同じくして、25日間（1889年12月10日～翌年1月8日）に亘って、東洋（日本）の新しい陶磁品、古い銅器、各種のシルクー、屏風、名人画、および珍しい品物を本月一日より歳末バーゲンという「減價賤售」の広告を『申報』に出していた。1885-90年、外務省漢口初代領事を務めた町田実一が行った「清国各港在留日本商人商店開閉年月及其営業種類」に関する調査では、錦芝洋行⁹⁾は明治18年（1885年）2月頃開店、陶漆器及び小間物を営業している。それは「田代屋ヨリ譲受ケタル品」¹⁰⁾と注記されているので、上海に最初にできた日本の商店田代屋（田代慶右衛門、長崎で有田焼を扱う老舗）との関係を告げている。芋づる式に調べていくと、田代屋は明治元年八九月開店、営業

8) 松旭斎「東戯更新」、『申報』1889年11月30日。以下煩雑を省くべく、『申報』を略する。

9) 原文では「錦芝号」と記載されているが、後述の『上海』などではすなわち錦芝洋行のことである。

10) 『日清貿易参考表』、町田実一著、東京：町田実一、1889年。ページ番号なし。

は「陶器及他小間物ヲ売捌キシガ明治十八年春ニ至り右の品ハ金子健二郎へ譲り渡し、今ハ極テ小ナル宿屋ヲ営業トス」¹¹⁾とある。さらに「錦芝洋行 明治十八年二月開店。営業は前記田代屋より譲り受けたる陶器漆器類及小間物の販売にして金子健二郎の女婿なる金子種三郎の洋行なり」¹²⁾という資料もあり、正確には錦芝洋行の金子種三郎が最初に天一の上海での広告代理を担当したことがわかる。

秋山俊為（1865～1954）。名は純、通称は隆道、字は俊為、探淵・碧城・白巖を号とする。江戸青山の田安藩士の家に生まれ、漢文は重野^{しげの}成^{せい}斎^{さい}に、書道は巻^{まき}菱^{りょう}湖^こに教わる。明治19年（1886）、22歳の時、駐日清国公使何如璋に伴って上海に渡り、篆書・隸書・楷書を徐^{じょ}三^{さん}庚^{こう}に、行書・草書を蒲^ほ華^かに学んだ¹³⁾。1890年2月の帰国後、東京京橋区（現、中央区）西紺屋町に東京弘書学院を創立して、全国初の通信教授を始め、日本近代書道に与えた影響が大きいと言われている。

秋山は天一より12歳の年下であるが、二人は懇意の間柄らしい。蒲華、高昌寒食生、黃夢暉等の現地の文人はすべて秋山の紹介で天一の奇術を観覧し、天一のために書や詩文を贈るように働かけた（後述）。天一が上海興行中、ちょうど秋山が留学生生活を終えて帰国する直前に当たり、現地で一連の送別会に追われていた。1889年仲冬に「聚豊酒楼」で行われた送別会に、天一も出席した¹⁴⁾。

塩川一堂。名は文鵬、一堂と号する。日本画家。京都生。父は江戸時代末期・明治期の画家、明治初期の四条派を支え、平安四名家の1人と称される塩川文麟（1801～1877）である。画を父に学び、のち中国で南画を研

11) 『日清貿易参考表』、同上。

12) 遠山景直編『上海』（遠山景直、1907年）224頁。

13) 西嶋慎一「秋山白巖と徐三庚」、松本市美術館編「秋山白巖展＝Hakugan：日本近代書道の源泉：生誕150年記念」、2014年10月、8頁。

14) 「観日本服部松旭齋天一演披記」、1889年12月27日。

究した。文展入選。明治40年(1907)存命中であった。『申報』に1888年11月から1891年4月まで、一堂の動静(交際、広告など)が絶えず掲載されていることから、上海在住時にすでに著名な画家であったことが伺える。明治36年(1903)2月、上海から帰国した一堂は、友人塩谷一六、日下部鳴鶴、岸田吟香などにより「清国ニ遊ヒ、遍ク禹域ノ氣勝ヲ探リ、広ク蘇杭ノ名流ニ交リ、留ルコト八閏年。筆大陸ノ氣象ヲ帶ヒ、心造化ノ妙用ニ契リ。又傍ラ泰西ノ絵事ヲ咀嚼シテ、造詣益々深ク卓然別ニ生面ヲ開キ」と江湖に紹介されている¹⁵⁾。そして、「古今名家新撰書画一覧」(1902年)、「増補古今書画名家一覧」(1911年)にその名が列せられている¹⁶⁾。天一が1889年11月の上海での初登場の日に、秋山や藤田重遠らと一緒に観覧した記録がある¹⁷⁾。その他は詳らかではない。

藤田重遠。名は重遠、号は排雲、近江の人。医学の家業を承ける一方、漢詩や書道を嗜み、若年にして上海に遊んでそれを修める。『申報』主筆黄夢琬と特に懇意がある。烟台、天津、湖北などへも遊歴し¹⁸⁾、岸田吟香が留守中に上海の楽善堂の業務を一任された¹⁹⁾。秋山や塩川らと同じ日に、天一の上海での初公演を観覧した²⁰⁾。

15) 「畫伯鹽川一堂君ヲ江湖ニ紹介ス——畫伯の紹介」、『刀剣』(丙午第1集)東京：花月庵、1906年1月。なお、引用文については、原文の旧カナ遣い・送りガナに従い、旧字については現行使用しているものに改めた。適宜句読点を施した。

16) 東京文化財研究所ホームページ。https://www.tobunken.go.jp/materials/banduke_name/722031.html

17) 「十一月朔日、應我友秋山儉爲之招、乃於人定後巾車而往。晤塩川、藤田二君、傾談片時」、「東戲奇観」、1889年11月25日。

18) 沙羨綺禪菴主「宴日本處士藤田排雲記」、1892年11月25日。また、「輔車相依論」(1892年1月4日)にも排雲のことを「少年發憤、留心經濟、蓋亦彼國之矯矯不羣者也」と讃えられている。

19) 匿名「附送藥單」、1892年2月22日。匿名「鳴謝雅贐」、1892年7月17日。

20) 「東戲奇観」、1889年11月25日。

二、天一と上海の中国人

天一はまた、清国の友人として次の者と交際した。

曾經滄海客。葉長栄のことで、字は少南、白下（現、南京）の人²¹⁾。『申報』に頻繁に登場し、『申報』総主筆何桂笙なども詩文の応酬を密にしている文化人である²²⁾。天一の今度の上海興行について、3回ほどの広告を担当した。

1889年12月7日に「四馬路桃源趣新到日本古今無比奇巧戲法」（四馬路桃源趣に日本古今無比、奇巧なる戲法が新しく到着）という広告を載せ、本月十八日より午後2時、夜8時と二部制で休み無しで開演し、入場料金は、上等席（テーブル席）は御一人前一元、中等席（椅子席）は御一人前五角、下等席は御一人前二角、という（図2参照）。会場が英国領事館の裏にある「西洋劇場」から四馬路桃源趣に変わったため、上述の11月22日付の最初の広告より、料金が半額に下がったことがわかる。同広告が12月14日まで連続して掲載されたのち、12月15日からは「東瀛奇技更新」と題だけを更新して、会場・時間・入場料など、ほぼ同じ内容の広告が繰り返された²³⁾。さらに、1890年1月30日から2月8日まで、「第一

図2. 曾經滄海客による天一奇術の広告。1889年12月7日附『申報』

21) 曾經滄海客少南葉長栄「寄楊潤樞大令錄請高昌寒食生晒政」、1887年2月6日。

22) 曾經滄海客葉少南「余將就聘台嶠、道出申江…率成二章錄呈高昌寒食生政可」、1887年2月10日。「台嶠」（浙江省天台山）に赴任する予定の葉長栄が上海に經由した際に「高昌寒食生」（何桂笙）との漢詩のやり取りである。天一の広告代理を担当する二年前のことである。

奇師東瀛奇技更新」とほぼ同じ内容の広告が掲載された。

上記の広告の文末にすべて「曾經滄海客代白」と記されていることから、天一の広告代理と判断できる。また、前述の「錦芝洋行」（89年11月22日、同23日、同28日）の後を受け継いで、その後（89年12月～90年2月）の広告代理を担当したことがわかる。広告代理が清国人に変化した理由については不詳である。

^{ほ か}
蒲華（1832～1911）。字は作英、または竹英・竹云、秀水（現、浙江省嘉興市）の人。虚谷・呉昌碩・任伯年と並んで、「海派四傑」と呼ばれるほどの書画家。前述のように、秋山の師である。1890年1月6日附『申報』に、「秀水蒲華作英甫稿」とある詩が掲載されている。「東海傑出大技師、遊戲三昧神鬼奇。秋山豪士云相知、招延高明集覆蓁」という書き出しを読むと、秋山の要請で天一の奇術を観覧したことが知られる。この詩は『技芸偉観』にも所収され、両者の間に若干の字句の相違が見られた。たとえば、「日本秋山儉為襲尉招陪（李）仲仙方伯、（黃）胎泉觀察、（葉）新農參軍（諸君）、觀服部天一翁演（東西）戲術歌（呈諸水吟壇削政）」（括弧内は『申報』本）という詩題においては、発表時に添削した痕跡が窺える。

また、同詩によると、李仲仙方伯、黃胎泉觀察、葉新農參軍も一緒に天一の奇術を見た。李仲仙とは李経義（1860～1925）のこと。字は仲仙、号は悔庵、安徽合肥の人、李鴻章の姪（弟鶴章の次子）である。奇術観覧時は、四川永寧道から湖南塩法道に転じたところである²³⁾。黃胎泉觀察については詳らかではないが、「觀察」は上司の補佐機関である督糧道、塩法道などを管理する道員への尊称であるため、省レベルの官員であろう。

23) 「東瀛奇技更新」、12月15日～30日、1890年1月1日～9日、1月11日～16日、1月27日～29日。

24) 「新任湖南鹽法道李仲仙觀察經義、於月之十六日行抵安省」（「皖公山色」、1889年4月2日）や「前任四川永寧道李仲仙觀察於本月十八日行抵皖」（「安慶官場紀事」、1889年12月20日）に基づく。

また、葉新儂参軍とは、葉慶頤のことで、字は新儂、号は策鰲。1881年から82年にかけて訪日したのち、在野の文人として上海で『申報』に日本の記事を、『集成報』に翻訳原稿を提供したりした²⁵⁾。そして、「海天驪唱図序」によると、彼は日本語もわかり、南京で黄夢畹（後述）と秋山のために通訳を担当したという²⁶⁾。

何桂笙（1841～1894）。名は鏞、字は桂笙・桂生、別に霧裏看花客・高昌寒食生²⁷⁾を号とする。またその家を擣殍山房とも称した。浙江山陰（現、紹興）の人。詩文、音楽に長じる。光緒十三年（明治20年、1887年）頃から、健康不調な『申報』2代目の総主筆錢昕伯（王韜の女婿）の代わりに総主筆を務める。1890年1月12日附『申報』に、「神乎其技」という題で500余字の長文を寄せ、奇術観覧の情景や感想を詳述している。著者名は未記載であるが、『技芸偉観』（7頁）に「藝進於道」という文章が掲載されており、タイトルは異なるも、内容は「神乎其技」と完全同一で、しかも「高昌寒食生何鏞贈」と明記されているので、「神乎其技」が何桂笙の作品であることがわかった。「神乎其技」では、秋山を通して天一のことを前から知っていながら、多忙に追われ、ずっと奇術の観覧に恵まれなかった。旧暦12月20日、ようやく暇ができたので、夢畹生や桐蔭主人と共に、初めて「桃源趣」へ天一の奇術を見に行ったという。そして、帰国間近の秋山の依頼に応じて、天一に「藝進於道」と書いて贈ったという。「藝進於道」の書は幸いに『技芸偉観』（20頁）に所収されている。書の後ろに「天一先生は文人にして遊戲に強い。すなわち、遊戲をもってその遊歴を便利ならしめ、遊戲の極意を極めたものである。私は秋山氏を通して先生にお目にかかり、未曾有の遊戲を観覧できた。秋山氏がまもな

25) 拙稿「清季赴日民間文人葉慶頤考」、『浙江外国語学院学報』2013年1期。

26) 黄夢畹「海天驪唱図序」、1889年12月29日。

27) 何桂笙は三月初九日の生まれ、三月初九日を寒食とする古代の高昌国の風習にちなんで「高昌寒食生」とした。鄭逸梅『芸林散葉』、中華書局、1982年、2517頁。

く帰国し、屢々額を依頼されたため、この4文字を草して贈り、ご叱正いただきたい。古越高昌寒食生桂笙何鏞識」とある。

上記の「神乎其技」の文章で触れた夢畹生とは黄協塤のこと（後述）で、桐蔭主人については未詳である。

黄夢畹（1853～1924）。名は本銓、または式権、号は夢畹・夢畹生・海上夢畹生・鶴窠村人・畹香留夢室主、江蘇南匯（現、上海市）の人²⁸⁾。1884年、『申報』に勤めてから、詩文で多大な名声を獲得し、1894年冬、何桂笙の没後、総編集長のポストに就任する²⁹⁾。『申報』を主宰すること20年の久しきにわたる。

夢畹は合わせて6回ほど天一の奇術を見たことから、天一にとっては、一番親しく付き合った中国人のようである。

1889年旧暦11月1日、秋山の招きで、天一の上海での初公演を見に行き、会場で塩川と藤田に会った。その後、「東戲奇観」と題して、600字ほどの記事を『申報』に寄せた³⁰⁾。次に、同じ年の仲冬に開かれた秋山の送別会の後に、天一の奇術を再度見た。そして、3日後、天一の要請で、寄鷗室主人を率いて、改めて観覧した。その後、秋山の依頼で、1200余に上る「観日本服部松旭斎天一演披記」を『申報』に掲載した³¹⁾。

文中の寄鷗室主人は『繡像宋史奇書』（上海書局、1906）などの著書が

28) 黄夢畹の生卒年や字などについては諸説があり、ここでは、陳玉堂『中国近現代人物名号大辞典』（浙江古籍出版社、2005年、第11620条）による。なお、卒年については、同大辞典では「一作1925」とある。

29) ここでは通説に従う。1894年、3代目の總主筆を務めるのは王韜で、黄夢畹は王の後を受け継いだという説もある。黄晋祥「晚清《申報》の主筆與社評」、『光明日報』2007年6月15日。

30) 「東戲奇観」、1889年11月25日。なお、この文章の作者については未記載であるが、黄夢畹と判断した理由は次の通り。①『申報』の主筆何桂笙と黄夢畹が書いた文章の大半は署名しない慣例となっているため、何と黄のどちらかに絞れる。②前述のように、何が多忙で、1889年旧暦12月20に初めて天一の奇術を見た。

31) 「観日本服部松旭斎天一演披記」、1889年12月27日。なお、この文章の作者については未記載であるが、次の理由で黄夢畹だと判断した。①『申報』の主筆何桂笙と黄夢畹が書いた文章の大半は署名しない慣例となっている。②文面から天一と懇意のある間柄。③使用されている表現（「遊戯」「雪泥鴻爪」など）が後述の黄夢畹が天一に贈った「遊戯神通」と相似している。

あり、他は詳らかではない。

4 回目は前述の通り、1889 年旧暦 12 月 20 日に高昌寒食生と一緒にであった³²⁾。

また、同じ年の旧暦正月 12 日、天一の招待を受けて「復新酒楼」で懇親会が開かれたのち、天一の興行を見た。それが『申報』所載 610 字に上る「游戲神通」に記されている。この文章は署名がないが、秋山を通じて、天一を知り、何回も奇術を観覧し、天一が上海興行中に「游戲神通」という額を書いて贈ったと記してある。文中にいう「游戲神通」は、『技芸偉観』（20 頁）に「游戲神通／天一先生雅鑒／黃夢畹」と所収されているため、『申報』所載「游戲神通」の作者の謎が解けた。

最後に 1890 年 2 月 19 日（光緒 16 年 2 月初 1 日）に張郁周と一緒に観覧した。張郁周、号は鶴沙浮槎仙吏、他は不詳。張が残っている作品からは、黄夢畹と親しい間柄が窺える³³⁾。彼は夢畹と一緒に見学に行った際に、入り口で天一の懇切な応接を受けた。そして、奇術を見てから、夢畹の依頼を受けて、「観日本松旭齋天一君演戲作此以贈并引」という題の漢詩を吟じ、『申報』に掲載したという³⁴⁾。

夢畹が天一と再会したのは、翌年の春の東京であった。『技芸偉観』（20 頁）に黄夢畹が贈った「聊以自娛」が収められ、「去る真冬、上海で天一先生にお目にかかり、目新しい絶技を何度も拝見した。その後、別れたが忘れがたい。中華歴 4 月、日本へ見学に参り、再会を喜んだ。これを記念すべく、泥酔のままで、この四字を扇子に記した。上海黄夢畹塗鴉³⁵⁾」と記されている。

32) 何桂笙「神乎其技」、1890 年 1 月 12 日。

33) 張郁周「與夢畹生遊駐馬坡口占」、1888 年 9 月 3 日、張郁周「季冬雜興錄請夢畹知己正之」、1889 年 3 月 6 日。

34) 鶴沙浮槎仙吏張郁周「観日本松旭齋天一君演戲作此以贈并引」、1890 年 2 月 20 日。

35) 塗鴉は謙譲語で、悪筆の意。

この書の日にちは明記されていないが、神田喜一郎（1898～1984）がその名著『日本填詞史話上』に、明治二十三年（1890）5月の末に、夢晩は「日本填詞史上に輝く唯一の専門家」と讃えられる森川竹磬を訪ねたと書いている。「身体の違和感を感じはじめた」竹磬が、「それでも上海から来日した黄夢晩の来訪を承け、またその離日の際には、特に満庭芳一関を賦して贈ってゐる。黄夢晩、名は協塤。その人を詳らかにしないが、相当な文士だったらしい」³⁶⁾。同著によると、夢晩は竹磬に「四字令 題竹磬聽秋仙館圖」を贈り³⁷⁾、明治填詞界で翹楚とされる森槐南とも、この年の五、六月に詞の応酬があった³⁸⁾。

この年（1890年、明治23年）の4月1日～7月31日、東京上野公園で第3回内国勸業博覧会が開かれた。夢晩はそのために来日したのである。しかも、そのきっかけを作ったのは他ならぬ秋山であった。

前年（1889年）の仲冬、帰国予定の秋山を見送る会が連日開かれた。夢晩は天南遯叟（王韜）、蒲作英、胡鉄梅、郭少泉、葉新儂、高昌寒食生（何桂笙）などと共に出席した。その席において、秋山が内国勸業博覧会への見学をしきりに誘った³⁹⁾。夢晩はその熱心さにすっかり心を打たれて、行くことを約束した⁴⁰⁾。今回の訪日では、岸田吟香の要請のもとで行われ、出発の前に、友人の王韜が日本駐在公使黎庶昌、参事官陳哲甫、及び他の日本人に紹介状を書いてくれた。そして、帰国後、二ヶ月ほどの訪日談を『扶桑攬勝集』という本にまとめて、王韜に序文を求めた⁴¹⁾。

このように夢晩は少なくとも6回ほど天一の興行を見て、そして、『申

36) 神田喜一郎『日本における中国文学Ⅱ—日本填詞史話下』、二玄社、1967年、87頁、160頁。

37) 「四字令 題竹磬聽秋仙館圖」は以下のとおり。「秋河漸橫。秋星半明。何来一片秋声。是三更四更。悟飛葉輕。簾吟韻落。有人斜倚孤檠。正清愁暗生」。

38) 神田喜一郎『日本における中国文学Ⅱ—日本填詞史話下』、161～162頁。

39) 黄夢晩「海天驪唱図序」、1889年12月29日。

40) 海上百花祠香尉「海天驪唱図書後」、1890年1月2日。

41) 王韜「書黄君夢晩扶桑攬勝集後」、1892年8月21日。

報』に「東戲奇観」、「観日本服部松旭齋天一演抜記」、「游戲神通」など、3回ほど最短600字ほどの記事を寄せた。二人の別懇の間柄がわかる。

郭少泉（～1899）。名は宗儀、字は少泉、浙江嘉善の人。上海在住の有名な書画家で、訪日したことがある。『技芸偉観』の末尾（24頁）に「東瀛大技師松旭齋天一先生来滬遊歴、将有口漢⁴²⁾之行。松飲於復新園、立席口占二絶、^{ママ}鋐^{ママ}請正堵。庚寅春。少泉郭字價」と収録されている。「庚寅」とは1890年（光緒16年、明治23年）に当たり、この年の春、上海での興行を終えて漢口へ赴こうとしている天一を見送る詩である。「口占二絶」と言っているが、収録されたのは一首のみである。また、この詩は他では見当たらない。少泉は上海に来たころから、何桂笙との交わりが始まり、桂笙の一番早くできた親友の一人として、桂笙の50歳祝賀会の発起人となっている⁴³⁾。また、少泉の50歳の際に、桂笙は1200字ほどの長文を贈り、祝賀の意を表した⁴⁴⁾。

江標（1860～1899）。字は建霞、号は萱圃、江蘇元和（現、蘇州）の人。詩文に長ける。湖南の学政を務め、『湘学報』を創刊。『技芸偉観』（21頁）に、「不可思議。光緒庚寅八月遊日本観松旭齋天一神技、贈此。建霞江標篆」とあることから、日本で天一の奇術を見て、「不可思議」と揮毫して天一に贈ったことがわかる。「庚寅」とは1890年のことで、江標は前年（1889）進士に登第したところである。彼は同じ年に東京で刊行された孫点の『嚶鳴館百疊集』の巻首にも序文を寄せている⁴⁵⁾。これは天一と上海で交遊した資料ではないが、合わせてここに記録しておく。

『技芸偉観』には、その他に孫彝の「妙不可測」、黄経維の「龍喜」、黎昌庶の「部演奥藝。松旭齋天一氏屬」、陳置の「神乎技矣。庚寅（1890）

42) 「口漢」は「漢口」の誤り。

43) 高瑩太痴甫「何桂笙先生五十寿序」、1890年5月8日。

44) 何桂笙「郭少泉先生五十双寿序」、1891年12月2日。

45) 神田喜一郎『日本における中国文学Ⅱ—日本填詞史話下』、46～47頁。

初夏天一大技師囑」なども収録されているが、いずれも作者が不詳である。

三、天一と李鴻章

李鴻章が天一に贈ったといわれる漢詩「儉為弟招觀東瀛松旭齋天一翁演技卒成七古一首」がある。この漢詩が最初に掲載されたのは、『技芸偉観：西洋奇術士松旭齋天一ノ来歴』⁴⁶⁾である。わずか25ページの薄い冊子の表紙に、「松旭齋蔵版」とされていることから私家版であることがわかる。編者の山田恭太郎は天一一座の番頭格だった人物で、かつ天一の姪である仲^{なか}の夫にあたることもあり⁴⁷⁾、主として宣伝目的で編集し、水増しの内容（特に略歴）が含まれていることは推察に難くない。内容は「西洋奇術士松旭齋天一之傳」（1～5頁）と天一関係の資料集（5～25頁）に二分することができるが、前者は天一の略歴だけが記されているのに対して、後者は、日中両国の人士が天一に寄せた漢詩・和歌・書、および天一の漢詩5首が収められた資料集である。中国人の作品については、前述したとおり、漢詩4人（李鴻章・何桂笙・蒲作英・郭少泉）と題辭7人8点（孫彝・黃経維・黃夢畹（2点）・何桂笙・黎昌庶・陳置・江標）からなっている。日本人の作品は以下のとおりである。槐南森大来・梅崖生山本憲・小室屈山・藍洲辨静・高田華洲・鷗波仙史（＝富田鷗波）・某伯爵（＝伊藤博文）・桂巖髯史（＝大村桂巖）・佛巖居士三浦端・笠城居士・新潟市隠七十四橋散史・京都彷徨子・堤新甫である。佛巖居士三浦端の漢文を除き、すべて漢詩である。また、題辭としては、金銅山樵・鳴鶴仙史東作（＝日下部鳴鶴）・黃石八十翁（＝岡本黃石）の書が掲げられている。

46) 山田恭太郎編、東京：陽濤館、1894年6月。なお、『松旭齋天一の生涯』（208頁）によると、『技芸偉観』は同11月改訂再版され、そのまま明治33年（1900）までに9版を発行している。筆者は初版以外の版本を未見。

47) 松山光伸『実証・日本の手品史』、東京堂出版、2010年、157頁。

さらに、海南浪人浜田鶴峰・耕巖居士・
 広瀬玄錶・恋道人の和文・和歌や松旭齋
 天一の漢詩（7首）が収録されている。
 宣伝の目的があったにせよ、一番早い時
 期（明治27年）に編纂された、天一の
 交友活動を知るうえで貴重な史料が多数
 含まれている。

上記豊富な史料の中で、李鴻章と某伯
 爵（＝伊藤博文）が日中政権の中枢にい
 る最高の政治家として天一に寄せた漢詩
 は白眉であり、天一にとっても身に余る
 ほどの光栄だったであろう。李の漢詩は
 『技芸偉観』の資料集の初頭に置き、全
 漢詩を記録したのち、「大清国 李鴻章」
 と明記している。（図3参照）天一自身
 もその性格から当然それを自慢げに友人
 に見せたり、宣伝したりしたとしてもお
 かしくない。

現に『技芸偉観』の資料に、堤新甫と
 という人が吟じた「或某日観天一子妙技。

和李鴻章君藻咏」（某日、天一氏の絶技を観、李鴻章君の詩に和する）と
 いう漢詩が掲載されている。作成年次が不詳であるが、李の詩韻を踏んで
 和したことは、詩題に示した通りである。漢詩の末尾の句で「清商吟詩又
 堪誉、有名李君賦概餘」（清国の商人は詩を吟じ、天一を褒め称え、有名
 な李鴻章君まで詩を賦している）と清の商人（実際は文化人）や李の漢詩
 を引き合いに天一を讃えている。堤新甫、名は廸、大介と称する。徳島市



図3.『技芸偉観』所載李鴻章が天一宛に贈ったとされる漢詩。但し、2頁にわたっている原文を一つにつなげた。

の人、篠崎小竹、佐藤一斎に学び、明治三十二年（1899）没す。年 75 歳⁴⁸⁾。著に『明治詩礎階梯』『明治新選詩語碎金』などが存する。また、同『技芸偉観』所載「新潟市隠七十四橋散史」が作成した漢詩でも、「松旭斎名傳世界、乍現清朝李鴻章」（松旭斎の名が世界に伝わり、清朝の李鴻章もにわかに〈観覧に〉現れた）と李鴻章も珍しく天一の奇術を観覧したと吟じている。このように、李鴻章の天一宛といわれるこの漢詩は、明治時代から今日までそのまま引用されており⁴⁹⁾、あたかも事実のように見受けられている。

ところが、筆者が調べていく過程で、李鴻章のこの漢詩と酷似した作品を 1889 年 12 月 6 日（光緒 15 年 11 月 14 日）附『申報』（以下、『申報』本と略す）に見つけた。以下、冗長を恐れず、全文を採録しておく。括弧内は『技芸偉観』所載李鴻章の漢詩（以下、『技芸偉観』本と略す）のうち、『申報』本と相違する箇所である。

冬三日、秋山僉為弟招同蒲君作英與予、觀東瀛松旭斎天一搬演各種戲術、巧妙獨絕、率成七古一首、即諸吟壇郢政（僉為弟招觀東瀛松旭斎天一翁演技卒成七古一首）

壺嶠⁵⁰⁾ 從來聚仙族、誕生人物超（迥）凡俗。

偶然遊戲示神奇、變幻迷離眩心目。

仲冬天氣猶春溫、廉纖⁵¹⁾ 細雨靡黃昏。

遭遇不淑意緒惡、杜門擬広絶交論。

秋山襲尉⁵²⁾ 東国彦、問字⁵³⁾ 曾（會）忝同席硯⁵⁴⁾。

48) 『阿波名家墓所記』（松浦徳次郎編、松浦徳次郎、1919 年）に基づく。

49) 『松旭斎天一の生涯』（青園謙三郎、品川書店、1976 年、113～114 頁）、『天——一代一明治のスーパーマジシャン』（藤山新太郎、NTT 出版、2012 年、143～144 頁）、蹉跎庵主人「松旭斎天一興行年表」（明治 23 年条）など。

50) 壺嶠：神が住んでいるという 2 つの山一方壺と貝嶠。ここでは日本を指す。

51) 廉纖：細々と降る様子。

勤（慇）相勸臘屐⁵⁵⁾ 行、駕言⁵⁶⁾ 聊籍愁懷遣。
 乃有技師松旭斎、虬髯⁵⁷⁾ 燕頤⁵⁸⁾ 辞詼諧。
 自云遍（編）歴欧墨亞、演弄巧妙無匹儕。
 旋（施）出娉婷⁵⁹⁾ 向客揖、玉容花貌衣如雪。
 當場跌坐⁶⁰⁾ 喋（嗒）咒⁶¹⁾ 頻，蘊櫝函藏加縈（繩）結⁶²⁾。
 一人戎裝執利兵、四面穿鑿透縱橫。
 燈光忽慘座客駭、隱聞嚶嚶啜泣声。
 抽刀解縛啟匣視、赫然⁶³⁾（脂胭）狼藉可憐（鱗）豸⁶⁴⁾。
 謂無異草使長生、幸有靈丹能起死。
 携将（來）一器水淋漓、高広盈尺圓如規。
 蒼茫⁶⁵⁾ 遺骸已（收）殮入、須臾行跡潜淆彌。
 既而（騫見）艷粧自外至、疑是天仙披雲墜。
 对客（嫣然）檢衽⁶⁶⁾ 笑凝眸（不勝嬌）、無限嬌柔（一笑回眸）生百媚。
 其⁶⁷⁾ 神妙不勝書（其他類推非虚譽）、略挙一隅以概餘
 記此願詔（頌）好奇者、盍往觀乎（先睹為快）毋（母）忽諸。

52) 尉は、古代の軍尉、太尉、衛尉といった武官を指す。襲尉とは父祖の位を受けつぐこと。秋山は武士の家に生まれた（『海天驪唱図序』、『申報』1889年12月29日）というので、こう呼ばれた。

53) 問字：人に教わること。

54) 同席硯：同門。同窓。

55) 臘屐：のんびりとした生活。

56) 駕言：外出すること。

57) 虬髯：渦を巻いたようなほおひげ。

58) 燕頤：つばめのような形のあご。貴人の相とされる。

59) 娉婷：容姿がすなりとしてあでやかなさま。

60) 跌坐：「東戯奇観」（1889年11月25日）にも「松旭斎装束如古佛、趺坐高台」という表現があるので、「趺坐」とすべしか。あぐらをかいて座ること。

61) 喋咒：しきりにしゃべるさま。

62) 縈結：繰り返し縛ること。

63) 赫然：赤くかがやくようす。ここでは血がにじむこと。

64) 豸：足のない虫。または虫。

65) 蒼茫：（血まみれになった遺骸は）はっきり見えない様子。

66) 檢衽：衣服のすそを少し持ち上げて行う、ヨーロッパの伝統的なあいさつ。

67) 「其」の後に一字欠如。『技芸偉観』本から、「其他」と補欠。

上記両テキストの内容について、合計 18 ケ所の相違点が見られた。そのうち、曾（會）、勤（勲）、遍（編）、旋（施）、憐（鱗）、母（母）といった 6 ケ所は、明らかに字体の相似による『技芸偉観』本の誤植であり、その他は、超（迺）、縈（繩）、赫然（脂胭）、将（来）、已（收）、既而（饒見）、詔（頒）、対客（嫣然）、笑凝眸（不勝嬌）、無限嬌柔（一笑回眸）、盍往觀乎（先睹為快）の 11 箇所は、漢詩の意味としてはどちらも通用するため、『技芸偉観』本でわざわざ改ざんする必要がない。おそらく『申報』掲載時に、作者海隅蒼生が改めて修正したと考えられよう。掲載時の添削例については、タイトルにおいても見られる。『技芸偉観』本の「俟為弟招觀東瀛松旭齋天一翁演技卒成七古一首」に対し、『申報』本は「冬三日、秋山俟為弟招同蒲君作英與予、觀東瀛松旭齋天一翁演各種戲術、巧妙獨絕、率成七古一首、即諸吟壇郢政」（下線は引用者）と改定を入れている。「冬三日」、「蒲君作英」、「即諸吟壇郢政」などの字句は、『申報』というマスコミの公共性や漢詩の社交性を考慮したうえ、加えられたのであろう。

さて、両テキストの本文中にもう一箇所の相違が存する。漢詩の最後にある「其神妙不勝書（其他類推非虚譽）」である。『申報』本の「其神妙不勝書」は 6 文字で、七言古詩としては明らかに一字が欠如しているミスがある。一方、『技芸偉観』本では「其他類推非虚譽」となっているため、この句から「他」一字を以て、「其他神妙不勝書」と補欠することができた。

以上の考察から、『技芸偉観』本が最初の手稿で、『申報』本が改定稿と考えても大過がなからう。

しかし、上記両テキストの最大の相違は他でもなく、作者にある。『技芸偉観』本の「大清国 李鴻章」という署名に対し、『申報』本の文末で

は「海隅蒼生求刪稿」となっている。換言すれば、作者は李鴻章ではなく、「海隅蒼生」である。「海隅蒼生」とは沿海の辺地にいる百姓の意味で、この詩の作者のペンネーム（号）と思われる。作者について、種々調べてみたが、残念ながら結果を得るに至らなかった。そこで、詩の文脈から詮索していくほかにすべもない。

『申報』本のこの漢詩の大意を訳せば、以下の通りになる。

仲冬三日、秋山俊為氏が蒲作英君と私を招き、東瀛松旭斎天一の披露した各種の奇術を観覧した。極めて巧みで、七古一首を草して、諸氏の斧正を乞う。

方壺と貝嶠に古から仙人の一族が集まっており、非凡な人物を輩出している。

偶々観覧した奇術は、神奇を示し、変化に富み目を奪う。

仲冬の天候はなお春のように温かく、黄昏に細雨がしとしと降り注ぐ。

私は不幸に遭遇し、気分を悪くし、門を閉じて広く友と絶交を論じようとはかっていた。

秋山氏は日本の秀才で、曾て同学のよしみを結んだ。

懇切に奇術見物を勧めてくれたため、気分転換に外出した。

カイゼルひげを生やし、威厳があり、話がユーモアな奇術師松旭斎が現れた。

欧米で興行を遍歴して、演芸が上手で、天下一だと自ら言う。

まもなく雪のように白いドレスを着た、美しい女太夫が出てきて、観客に一礼した。

そして、舞台にあぐらをかいて座り、呪文をしきりに唱えられているうちに、箱に詰められ、さらに縄で嚴重に縛られた。

そこに剣を持つ一人の兵隊の格好をする男が現れ、箱の四方から剣を刺し通した。

その時、明かりが暗転して、観客が思わず息を呑んだ。とたんに、周囲からすすり泣きが微かに聞こえてきた。

男は剣を抜き、縄を解き、箱を開けてみると、女太夫は血まみれで、かわいそうに足のない虫のようにになっていた。

男は、長生きさせる珍奇な植物はないが、蘇生させる霊薬はあると言いながら、

1 尺ほどの円筒形の水桶を持ってきて、水を張りつめた桶の中に
模糊たる遺骸を入れて、それがたちまち消えてゆく。

と思ううちに、まるで仙女が空から降りてきたように、女太夫はきれいな服を着て、外から会場に入ってきたではないか。

女太夫は観客に微笑みながら、カーテシーをした。その様子は、なまめかしい、百の媚態を呈したのである。

奇術はその他にも奇妙なところがあり、枚挙にいとまがないが、一例のみを挙げて他を類推する。

これを記して好奇心あふれる皆さんに、躊躇なく見に行こうと勧める。

海隅蒼生求刪稿

奇術見学の経緯を述べ始め、演目（三剣バクス詰め）を重点的に描写したうえ、天一の奇術を見に行こうという勧誘で詩を結んでいる。

秋山儉為を弟⁶⁸⁾と呼ぶことから、秋山（24 歳）より年上で、しかも、「遭遇不淑意緒悪、杜門擬廣絶交論」（私は不幸に遭遇し、気分を悪くし、門を閉じて広く友と絶交を論じようとはかっていた）という句から、大きな不幸に遭遇して、友人との交際に気乗りしないまで落ち込んでいる状態を描写しているため、肉親（妻か両親）が亡くなった可能性が高いと考え

68) 「弟」は自分を指すなら謙称であるが、相手のことを指すなら、「年下の者」、「門人」の意味になる。

られる。したがって、秋山とかなりの年齢の差があることを推測してもよからう。また、「問字曾忝同席硯」（曾て同学のよしみを結んだ）という表現から、同じ書画の大家である蒲華に師事したことが判明した。そういう縁を持つ仲なので、秋山の熱心な勧誘を受けて、意気消沈な私は、つい天一の奇術を鑑賞に出かけたという書き出しである。

このように、漢詩の署名や内容、そして、当時の李鴻章が漢口ではなく、天津に住んでいる史実などをあわせ考えると、この漢詩は李鴻章が作成した可能性が皆無であろう。

天一は後年、記者へのインタビューで、何度も漢口興行の件に触れ、道台⁶⁹⁾の水芸禁止の話や領事町田実一⁷⁰⁾のことを興味津々詳述している⁷¹⁾のに対して、肝心な李鴻章のことだけは一度しか触れていない。しかも、「丁度この時李鴻章も見物にまゐりまして左の七古一首を贈つてくれました。その後支那沿岸の各都市におきまして興行を為し、翌年五月帰国いたしました。」⁷²⁾とこれきり話を打ち切ってしまった。やはりうそにも限界を感じたためであっただろうか。

では、この漢詩の内容を少しでも詮索すれば、すぐバレてしまうのに、と怪訝に思う人がいるかもしれない。

それは天一の性格に由来するところが大きいと考えられる。天一は優れたマジシャンではあるが、はったり屋の持ち主という点においては、残念

69) 道員、觀察ともいう。一省の各部門（例えば糧政とか塩務というような）の長、または管内各府県の行政を監察する役人。

70) 町田実一（1842～1916）は薩摩藩出身。1885-90年外務省漢口初代領事。『日清貿易ノ話』（町田実一述、出版者不明、1891年）などがある。

71) 太郎坊「松旭齋天一（続き）」、『伊勢新聞』明治34年2月14日、「松旭齋天一の談話（五）」、『土陽新聞』明治34年5月24日、「松旭齋天一洋行談（つゞき）」、『河北新報』明治39年2月25日。

72) きいほう「天一の奇術談（六）」、『大阪毎日新聞』明治33年（1900）11月12日。以上の新聞記事はすべて蹉跎庵主人「見世物興行年表」による。なお、天一の話では、漢口道台に禁止されたため、「亜米利加人の大きな茶庫」で公演されたこの日に、「丁度この時李鴻章も見物にまゐりまして左の七古一首を贈つてくれました」という。高官の李鴻章が粗末な茶の倉庫で公演を見たということは、作り話にしては出来すぎている。

ながら学界の「定評」となっている⁷³⁾。彼は若いころアメリカへ行ったと主張するが、片言ぐらいの英語もしゃべれなかったことから、その主張の信憑性が疑われている。娘の久保美子さんはこう証言している。「晩年に近いころの話ですが、父はよく舞台上でぺらぺらと外国語をしゃべっていました。あとで母が何を話していたのかと聞いてみますと、あれは英語じゃない、日本語をさかさにしゃべっただけさ……とすましていました。万一、お客さまの中に英語のできる人がいらしたら大変ですから以後慎んでくださいよ、と母が真剣になって注意していたのを覚えています」⁷⁴⁾。

おわりに

以上、天一の上海における交遊圈を見てきた。最初は日商錦芝洋行、その後は現地の文人である曾經滄海客がそれぞれ広報活動を担当した。

また、書道勉強のために上海留学中の秋山為儉を通じて、蒲華や高昌寒食生、黃夢畹などに働きかけ、現地の多くの文化人が天一の奇術を鑑賞した。秋山が働いた役割は大きかった。

そして、現地文化人のうち、近代中国で最も影響力を有する『申報』の中心的な存在である高昌寒食生や黃夢畹が重要な役割を果たした。特に、6回も天一の奇術を観覧した黃夢畹は、中国人が書いた7点の記事のうち、3点ほどの長文を『申報』に掲載し、天一や日本の奇術文化の宣伝に一役を果たした。天一の交遊圈は、『申報』を中心に、曾經滄海客、郭少泉、蒲作英、葉新農、桐蔭主人、寄鷗室主人、鶴沙浮槎仙吏などへと拡大していき、李鴻章の姪である李仲仙方伯、黃胎泉觀察といった省レベルの役人も含まれるようになった。

73) 『奇術師一代—松旭齋天一の生涯』(1976年、67頁、102～103頁)、『実証・日本の手品史』(2010年、156～157頁)、『天一代—明治のスーパーマジシャン』(2012年、151頁)。

74) 『奇術師一代—松旭齋天一の生涯』、68頁。

天一はこのような交遊圏を通じ、現地の有力な媒体『申報』を生かして、上海で興行活動を華やかに展開していったのである。

最後に、李鴻章が天一に贈ったといわれるこの漢詩は、伝統から近代への過渡期に身を置かれた天一が演出した下手とも上手ともいえない「手品」にすぎず、百年が経過した今日、種明かしとなった。